高等学校

平　成　7　年　度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

教育研究員名簿

No.	学区	学　校　名	氏　名
1	1	雪谷高等学校	間宮　進
2	1	田園調布高等学校	加藤朋房
3	2	目黒高等学校	原　誠一郎
4	3	杉並工業高等学校	村田明生
5	4	工芸高等学校	海發真一
6	5	日本橋高等学校	小川達夫
7	9	保谷高等学校	高木亀介
8	10	永山高等学校	宇佐美俊哉
9	11	大島南高等学校	山寺佳幸

担当　教育庁指導部高等学校教育指導課　花野耕一

目　次

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1　研究のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2　研究の背景と主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・2
　3　研究の進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　4　研究の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅱ　調査結果から見た生徒の意識と実態・・・・・・・・・・・・3
　1　自己理解について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　2　進路について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　3　ボランティア活動について・・・・・・・・・・・・・・・・6
　4　生き方について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
Ⅲ　調査結果に基づいた考察と提言・・・・・・・・・・・・・10
Ⅳ　ホームルーム活動の実践事例・・・・・・・・・・・・・・12
　1　事例1「自分らしさの創造」・・・・・・・・・・・・・・12
　2　事例2「自主的・実践的な討論活動」・・・・・・・・・15
　3　事例3「ボランティア活動への動機付け」・・・・・・・18
　4　事例4「主体的な進路学習」・・・・・・・・・・・・・・21
Ⅴ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

研究主題

「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う指導の工夫」

Ⅰ　はじめに

生徒は、学校における基礎的な生活集団であるホームルームを基盤に、ホームルーム活動をはじめとする学校生活における様々な活動に参加している。そして、学校生活を共に過ごす中で、個人としてまた集団の一員として、望ましい人間としての在り方や生き方について学んでいる。そのため、教師は、生徒が人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かし、自己実現を図るとともに、豊かな人間関係を築くことができるよう、十分な生徒理解を基にして生徒に適切な指導・援助をする必要がある。

自己実現とは自己の可能性を現実化することであり、人間だれもがもつ、基本的な生命欲求である。それでは、生徒の自己実現を援助するため、教師に望まれる資質はどのようなものであろうか。

例えば、学校行事のマラソン大会でタイムを少しでも縮めようと努力する生徒の姿が、まさに自己を実現していこうとする姿である。この時、沿道やゴールで「もうすぐだ！」「頑張れ！」と励ましてくれる教師がいれば、生徒はなお一層の努力を続ける。この場合、疲れて挫けそうになる心を励まし、支えてくれる教師がいることが、努力の継続を可能にする。また、教師の「声のかけ方」や「手のたたき方」等は、生徒のやる気や走り方を左右する。このことから、教師が生徒の自己実現を援助するためには、生徒への愛情が満ちていることと専門性を備えていることが必要であると考えられる。

本研究にあたっては、生徒が人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現に向けて努力するための要素・要因は何か、また、教師のどのような指導・助言が生徒の自己を生かす能力を育成できるのかを探究したいと考える。

1　研究のねらい

物質的豊かさや情報の氾濫に押し流されて、人間としての在り方生き方についての自覚が不足し、自己を生かす能力が十分に育成されていない生徒が多く見られる。そのため、教師はまず、ホームルームが生徒指導、進路指導、道徳教育などの計画的・組織的な指導の場であることを認識しなければならない。その上で、特別活動全体の目標である「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」（高等学校学習指導要領）ことの実践に努めなければならないと考える。

しかしながら、ホームルーム活動における「人間としての在り方生き方の教育」の指導に関する実証的・実践的な研究は十分とは言いがたい現状にある。そこで本研究は、生徒の意識についてアンケート調査を行い、集計結果の分析・考察から、ホームルーム活動における「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う指導方法」を探究することとした。また、ホームルーム活動における指導の工夫について提言を行い、研究員の実践した指導事例を紹介する。

2　研究の背景と主題設定の理由

ホームルームは学校における生徒の基礎的な生活集団として編成され、親密な人間関係を育成する場である。したがって、ホームルーム活動の充実改善を図ることは、生徒の学校生活全体への適応を図り、心身の健全な育成を目指すために大きな意味をもっている。

そのため、ホームルーム担任は、ロングホームルームや日常生活を通じて人間関係を深めさせることが肝要である。さらに、生徒の実態を十分に把握して指導・助言を行い、生徒の積極的な活動意欲の育成に努めることが重要である。また、生徒一人一人の理解に努め、個別の相談にのるなど、積極的に生徒との人間的な交流を図ることが大切であると考える。

本年度研究員は、生徒に人間としての在り方生き方についての自覚を深めさせ、自己を生かす能力を養うためには、次のことが重要であると考えた。

(1)生徒一人一人の興味・関心を喚起し、自己理解を深めさせる。

(2)生徒一人一人に自主的・実践的な活動の場を与える。

なぜならば、学校教育においては、生徒一人一人の豊かな人間性を培うとともに、主体的に自己実現を目指す力を育てることが大切であるからである。

そこで、本研究では、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う指導の工夫」を研究主題として設定した。

3　研究の進め方

本調査を実施するに当たって、生徒の意識と実態に関する先行研究・文献より、「生徒が人間としての在り方生き方についての考えをどのように確立していくか」の観点から質問項目を検討した。質問項目の検討後、生徒の人生観、職業観、自己理解に関する基本的な考え方について考察し、予想される範囲を面接調査時の質問項目として設定した。

次に研究員各自が前述の質問項目を基に所属校生徒と面接調査を実施し、その結果をもち寄って４領域、４７項目の質問紙を作成した。作成した質問紙の母集団は、研究員所属の各学年生徒２～３クラスを無作為に抽出する無記名、群別抽出法を用いた。なお、科別、性別の区別に関しては配慮を加えていない。研究員の所属校が全都にわたり、校種も多様なため調査結果に偏りが生じないものと考えられるからである。

次に研究員の所属校でアンケート調査を実施し、集計結果の分析を基にしてホームルーム活動における指導方法の工夫を提言としてまとめ、提言にそった実践を行った。

これらの提言および実践事例が、各校において生徒の人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うための特別活動の指導の参考となれば幸甚である。

4　研究の経過

①	5/15	工芸高校	研究主題の決定	⑥	10/ 6	目黒高校	実践事例の報告
②	6/ 9	保谷高校	研究内容の検討	⑦	11/ 6	田園調布高校	１次原稿提出
③	7/ 6	日本橋高校	質問紙集計	⑧	11/28	杉並工業高校	原稿検討
④	8/22～24	御岳研究集会	調査分析および考　察	⑨	12/ 8	永山高校	最終原稿の作成
				⑩	1/22	雪谷高校	発表会準備
⑤	9/14	雪谷高校	実践事例の検討	⑪	2/13	都　研	研究発表

Ⅱ　調査結果から見た生徒の意識と実態

高校生の在り方生き方についての意識調査を研究員の勤務校９校で実施した。アンケート調査の回答数は右の表の通りである。

なお、グラフの数値の単位はすべて％である。

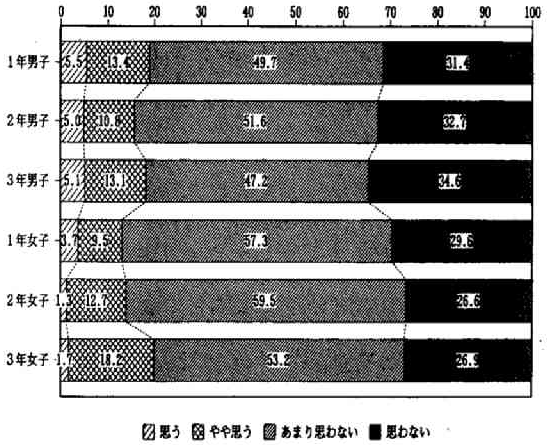
	男　子	女　子	合　計
１年	４４５	３３６	７８１
２年	３４４	２４３	５８７
３年	４１３	３０３	７１６
全体	１２０２	８８２	２０８４

１　自己理解について

(1)「あなたはクラスにとって『必要』とされていますか」（図１）

８割以上の生徒がクラスにおいて自分は『必要』とされていないと考えている。生徒に自己有用感をもたせるため、集団の一員として自らの能力を発揮できる機会を設ける指導の工夫が必要である。

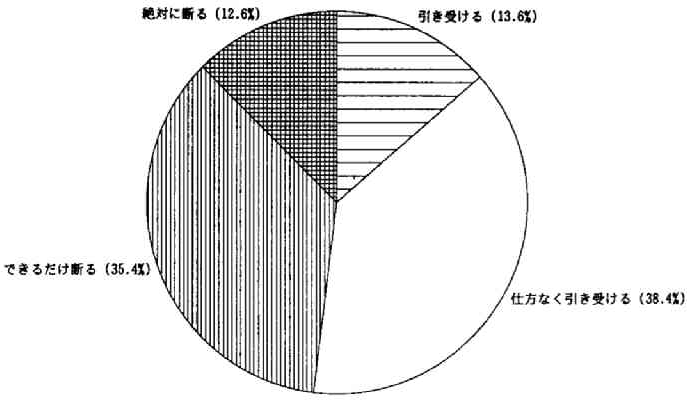
(図１) あなたはクラスにとって「必要」とされていますか



(2)「あなたはクラスで希望しない係・委員に選ばれたらどうしますか」（図２）

約半数の４８％の生徒が「断る」姿勢を示している。組織の中で一人一人の役割意識が大切であるにもかかわらず、消極的な生徒が多い。また、係・委員の仕事にあまり興味をもっていない生徒も多いと考えられる。係・委員の仕事の意義や必要性を認識させ、やりがいが感じられる係・委員の活動になるよう指導を工夫する必要がある。

(図２) 希望しない係・委員に選ばれた場合あなたはどうしますか



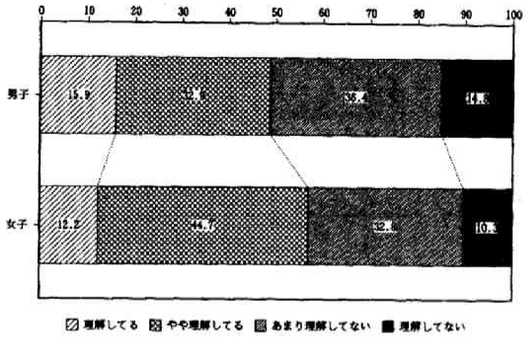
(3)「あなたは今、充実感を感じていますか。また何に一番充実感を感じていますか」

充実感を感じていると回答した生徒は全体の５３％である。充実感を感じている生徒の中で次のものが上位を占めた。「友達」（２８．９％）、「部活動」（２２．９％）、「趣味」（１９．３％）、「授業・勉強」（７．４％）

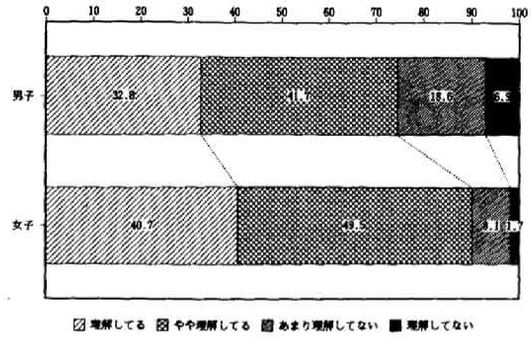
(4)「あなたは、自分の長所、短所を理解していますか」（図３－Ａ、図３－Ｂ、図３－Ｃ、図３－Ｄ）

自分の長所を理解していると回答した生徒は５割ほどであるのに対し、短所を理解しているという生徒は男子で７５％、女子で９０％もいた（図３－Ａ、図３－Ｂ）。自分自身に対する自己評価が低く、その結果、自己を生かす能力を発揮することに消極的になってしまう傾向にある。自分のよさを見つけさせる指導の工夫が必要である。

（図３－Ａ）あなたは自分の長所を理解していますか

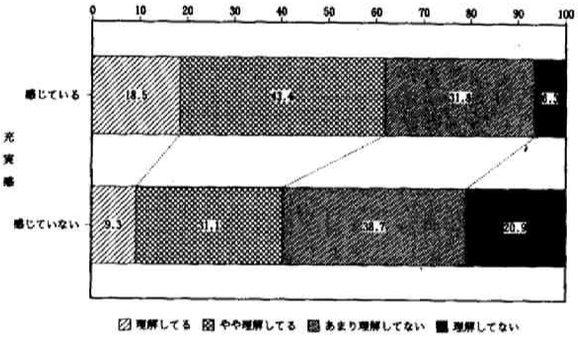


（図３－Ｂ）あなたは自分の短所を理解していますか

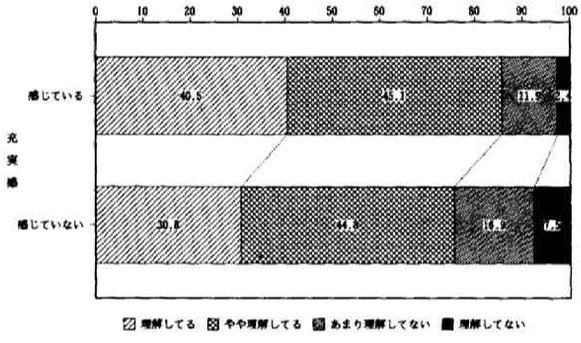


そこで、「今、充実感を感じている」と回答した生徒と、そうでない生徒の自分の長所、短所の理解の相関について調べてみた（図３－Ｃ、図３－Ｄ）。長所についても短所についても、明らかに充実感を感じている生徒の方が自分についてよく理解していることが分かる。

（図３－Ｃ）自分の長所を理解していますか



（図３－Ｄ）自分の短所を理解していますか



(5) 考　察

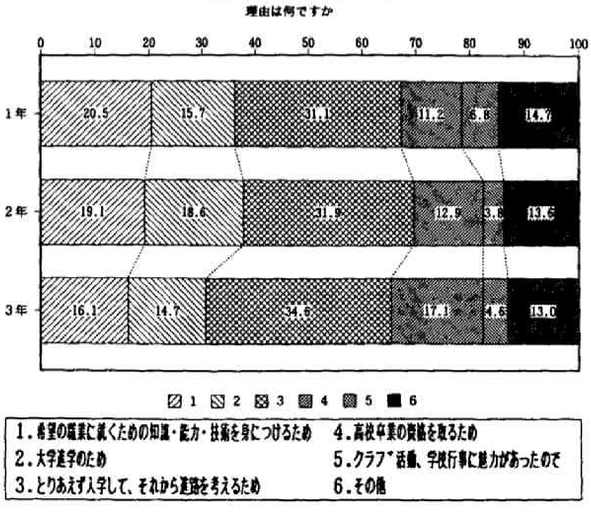
自己を理解するということは決してたやすいことではないが、自己に対する理解が深まることで「自分らしさ」が育ち、さらに他人に対する思いやりが生まれる。生徒の中には、主観的な見方・考え方だけで自分の意見を貫き通そうとする者がよく見られる。相手の立場に立ち、客観的な見方・考え方を養うことが必要である。ホームルーム、学年、全校の集団の中で、他者の考えや価値観に触れることにより、自己の考えを深化し、自らの在り方生き方の自覚を深め、自己実現を図ることができるような指導の工夫が必要である。

2　進路について

(1) 「あなたが現在の高校に入学した理由は何ですか」（図４）

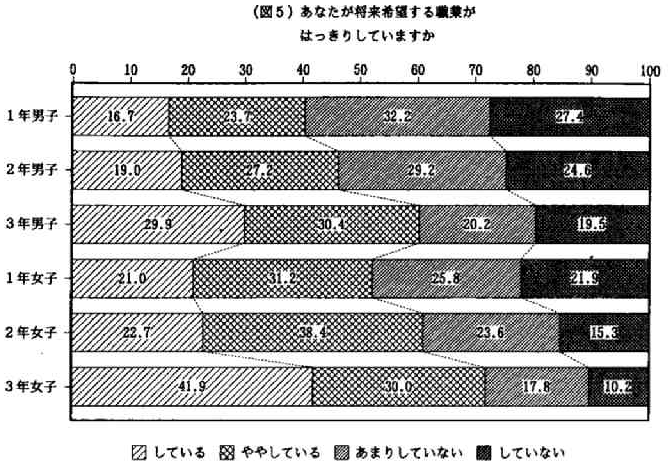
「とりあえず入学してそれから進路のことを考えたい」という回答が３３％と最も多い。自分の進路について、真剣に考え、高校に目的意識をもって入学することを理想とすれば、この結果は軽視できない。現在の自分の在り方を将来の自分の在り方生き方につなげて考えさせる指導の工夫が必要である。

（図４）あなたが現在の高校に入学した理由は何ですか



(2) 「あなたが将来希望する職業ははっきりしていますか」（図５）

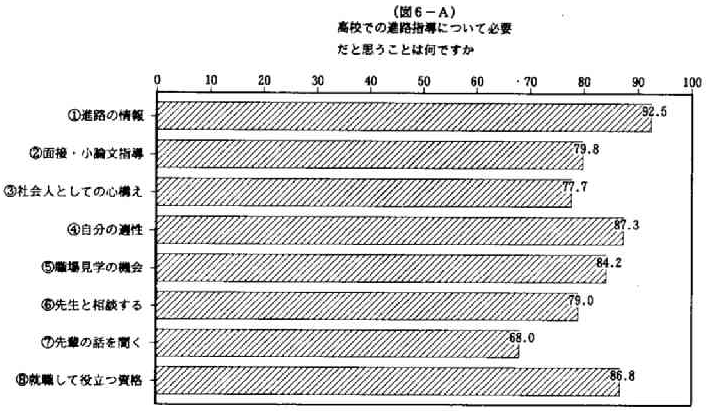
学年がすすむにつれはっきりしてくるのは当然と思われるが、３年生でも３分の１の生徒がはっきりしていないと回答している。これは職業についての意識が低く、また職業観を育てる機会が少ないためと考えられる。高校入学時と同じように「取りあえず進学してそれから職業についても考える」といった考えの生徒も少なくないので、単なる出口の指導にならないように指導する必要がある。



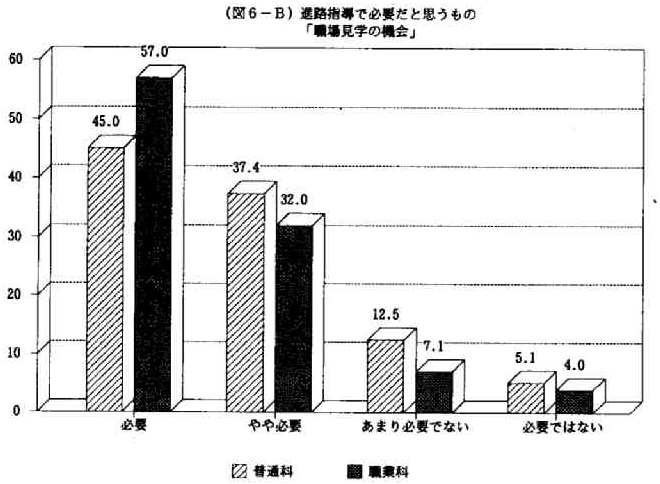
(3) 「高校での進路指導について必要だと思うことは何ですか」（図６－Ａ、図６－Ｂ）

この設問には①「進路の情報」、②「面接小論文指導」、③「社会人としての心構え」、④「自分の能力や適性を学ぶ機会」、⑤「職場見学などの機会」、⑥「先生と相談する機会」、⑦「先輩の話を聞く機会」、⑧「就職してから役立つ資格を学ぶ機会」という８項目でその必要性を回答してもらった。

ほとんどの項目について７割以上の生徒は「必要である」と回答している。しかし多くの生徒はやらないよりやってくれた方がいいといった程度の考えでこの結果になったとも考えられる。一つ一つの項目について、その意義をきちんと説明し、理解させて指導する必要がある。

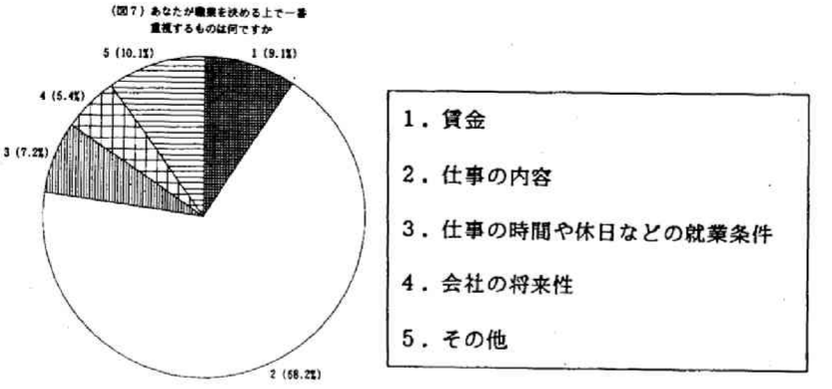


また、専門学科の生徒と普通科の生徒との比較ではそれほど大きな差は見られなかったが、「職場見学の機会」の項目については他の項目より大きな差が見られた（図６－Ｂ）。専門学科では、職場を見学する機会が普通科より多い。専門学科の生徒が「職場見学の機会」の必要性を感じていることは、職業意識を高める指導として参考になる結果である。



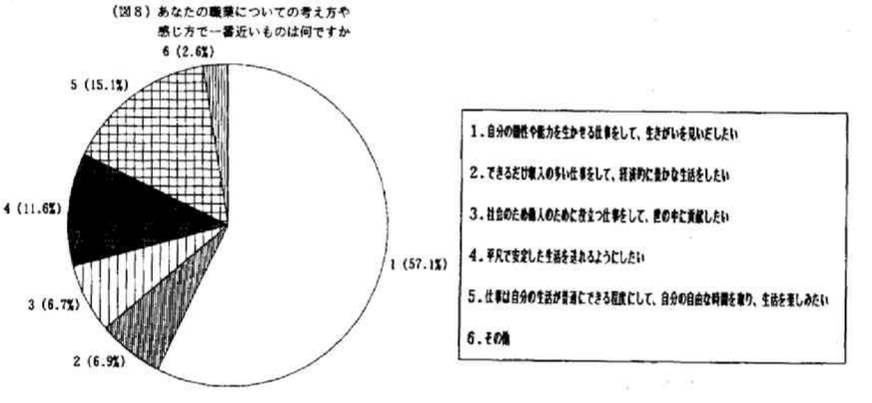
(4) 「あなたが職業を決める上で一番重視するものは何ですか」（図７）

７割近くの生徒が「仕事の内容」を選んでいる。非常に多岐にわたる職種の中から自分に適したものを選択することは容易なことではない。ただ、「○○会社に入ればよい」というのではなく、「そこで何をしたいのか」を考えさせる指導の工夫が必要である。



(5) 「あなたの職業についての考え方や感じ方で一番近いものは何ですか」（図８）

６割近くの生徒が「自分の個性や能力を生かせる仕事をして、生きがいを見いだしたい」と回答している。自己の能力を生かすためにも、自己をよく理解し、生き方についての自覚を深めることが大切である。



(6) 考　察

現在の高校生の特性や進路の多様化に対し、教師は画一的な指導で対応することは難しい。特に進路指導については、生徒一人一人の個性を尊重し、在り方生き方についての自覚を深める指導が必要である。通りいっぺんの出口指導にならないように、これからはホームルーム活動等を通して、①自分を正しく理解させ、②望ましい職業観、勤労観を身に付けさせ、③将来の生き方にそった生活設計を立てさせる、指導の工夫が必要である。

3　ボランティア活動について

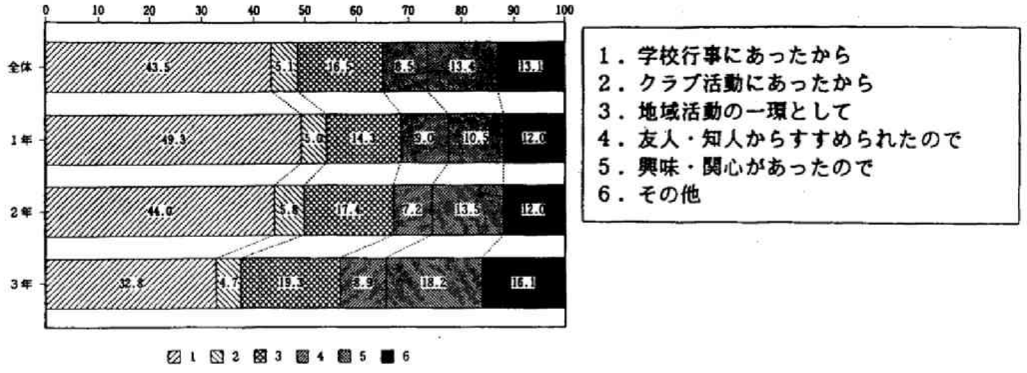
(1) 「あなたはボランティア活動に参加したことがありますか」

ボランティア活動に参加したことがある生徒は、１年生４５％、２年生３７％、３年生２８％であった。これは、近年中学校でボランティア活動を経験させる機会が多くなった結果と考えられる。

(2) 「ボランティア活動に参加した一番の理由は何ですか」（図９）

一番多かった回答は「学校行事にあったから」ということである。ボランティア活動の動機付けとして、学校の取り組みが重要な役割を担っていると考えられる。

（図９）
ボランティアに参加した理由は何ですか

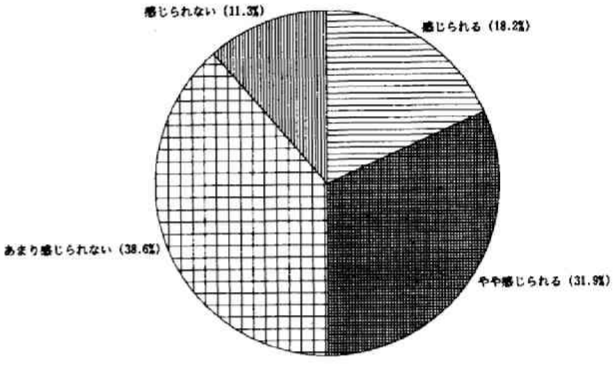


1．学校行事にあったから
2．クラブ活動にあったから
3．地域活動の一環として
4．友人・知人からすすめられたので
5．興味・関心があったので
6．その他

(3) 「あなたの人生にボランティア活動は影響を与えていると感じられますか」（図１０）

ボランティア活動に参加した生徒の半数が「感じられない」と回答している。本来のボランティア活動の意義をよく理解させ、参加しただけのものにならないよう指導を工夫する必要がある。

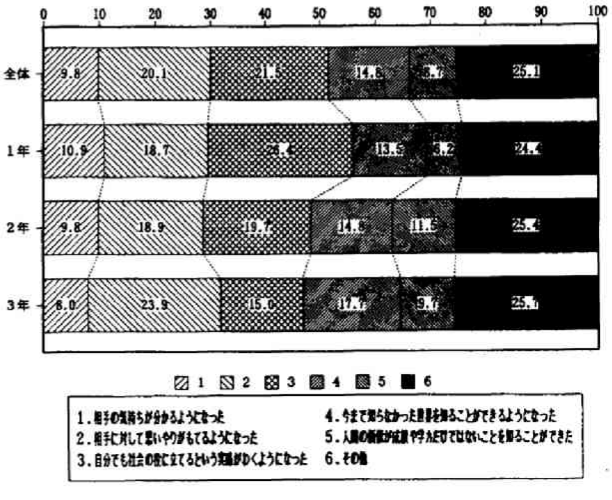
（図１０）あなたに人生にボランティア活動は影響を与えていると感じられますか



(4) 「ボランティア活動によって自分が一番影響を受けたことは何ですか」（図１１）

ボランティア活動から影響を受けたと感じている生徒のうち「自分でも社会の役に立てるという実感がわくようになった」と回答した者が最も多く、大変意味のある結果だと思われる。自分に対し、長所をあまり理解せず、自己有用感を感じていない生徒が多い中で、自分に自信をもち、自己の存在感を意識させるボランティア活動になるよう指導を工夫する必要がある。

（図１１）
ボランティア活動によって自分が一番影響を受けたことは何ですか

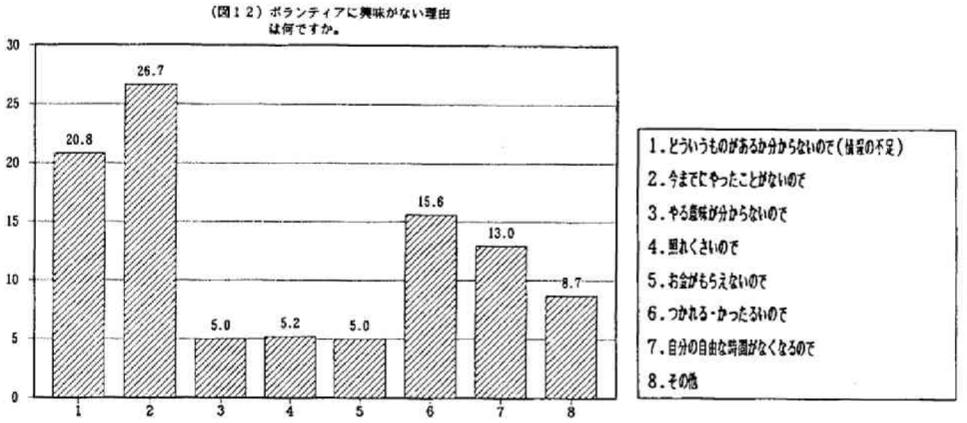


(5) 「あなたは今後もボランティア活動を続けますか」

ボランティア活動に参加したことのある生徒のうち約８割の生徒は「続けてもよい」（自分一人でも続ける‥‥７％、暇があれば続ける‥‥３６％、友人と一緒であれば続ける‥‥１５％、学校行事ならば続ける‥‥２０％）と回答しており、その体験をいかに自分の生き方に生かし、人間性を高めるか、という観点を指導の中に取り入れる必要がある。

(6) 「ボランティア活動に、興味がない理由は何ですか」（図１２）

「ボランティア活動に興味がない」と回答した生徒は全体の４６％ほどであった。その理由は「どういうものがあるのか分からないので（情報の不足）」、「今までにやったことがないので（経験の不足）」で、約半数を占めている。情報の提供や、活動の場を積極的に増やす工夫が必要である。



(7) 考　察

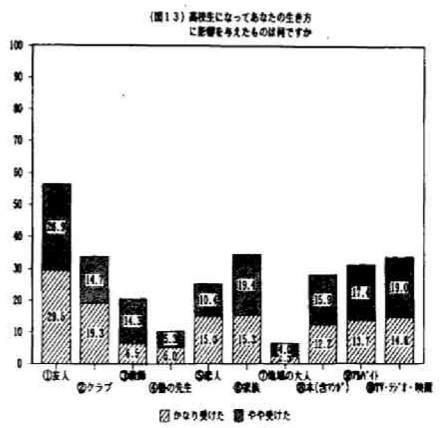
ボランティア活動は、自らの在り方生き方を考え、また他人に対する思いやりをもち、さらには自己有用感を獲得するよい機会になると考える。また、社会的に弱い立場にある人たちを本当に理解し、力になることができる喜びを体得させることは、在り方生き方の教育の大きなねらいである。さらに、そのような世界を知ることにより、生徒は自分の人生観をより一層幅の広いものにしていくと考えられる。

ただし、ボランティア活動は自分の人生に影響を与えていないと感じている生徒が約半数いることも事実である。ボランティア活動の意義について十分に理解させ、一人一人の生徒にとって魅力があり、やりがいのある活動となるよう指導する必要がある。

4　生き方について

(1) 「高校生になってあなたの生き方に影響を与えたものは何ですか」（図１３）

この設問は①「友人」、②「クラブ」、③「教師」、④「塾の先生」、⑤「恋人」、⑥「家族」、⑦「地域の大人」、⑧「本（含マンガ）」、⑨「アルバイト」、⑩「ＴＶ・ラジオ・映画」の１０項目についてそれぞれ影響を受けた度合いを回答して

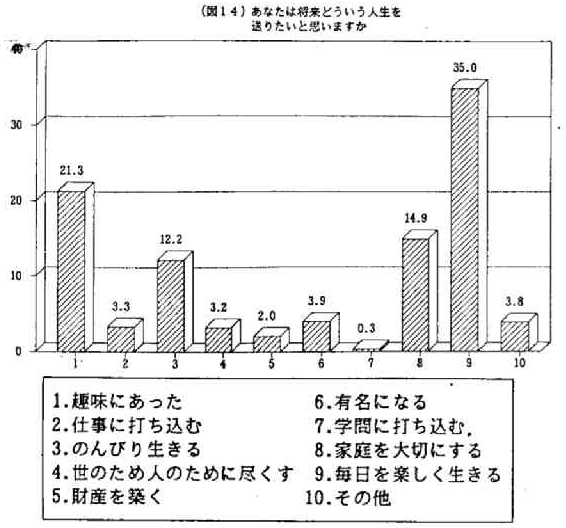


もらった。

「友人」では半数以上の生徒が影響を受けたと回答しているが、全体的には「家族」、「教師」、「地域の大人」など自分のまわりの者から影響を受けた度合いが低い。異世代との人間関係が薄く、地域社会との連帯・親密性が低下していると考えられる。

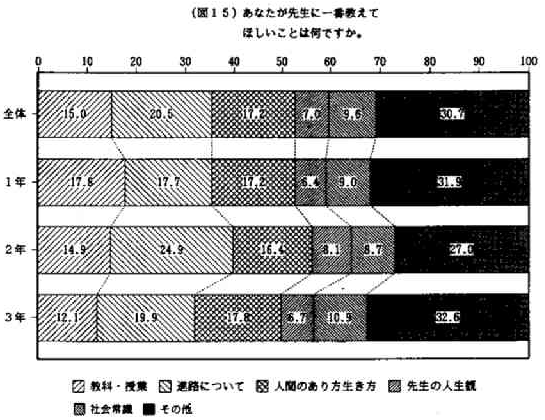
(2) 「あなたは将来どういう人生を送りたいと思いますか」（図１４）

全体的に見ると、「趣味にあった」、「のんびり生きる」、「毎日を楽しく生きる」といった項目で７割近くを占めている。



(3) 「あなたが先生に一番教えて欲しいことは何ですか」（図１５）

「その他」の項目の大半は「特にない」と回答しており残念な結果である。今後の課題としなければならない。注目したいことは４分の１にあたる生徒が「人間としての在り方生き方」、「先生の人生観」を選んいることである。教師として、教科指導はもとより、人間としての在り方生き方の教育についても十分な指導が行えるようにすることが必要である。



(4) 考　察

青年期は、自らの行動は自ら選択決定したいという欲求が強まる一方で、自分の将来の生き方や進路について不安をもちながら模索する時期である。しかし、生徒は、経験や情報の不足から、自ら適切な判断を下すことが困難な場合が多い。そのため刹那的な考えや自己中心的な考えが優先されてしまうことにもなる。したがって、教師は在り方生き方の教育に積極的に取り組み、様々な機会を通して生徒とのコミュニケーションを図り、生徒の「自己を生かす能力」を養う指導を工夫し、実践していく必要がある。

Ⅲ　調査結果に基づいた考察と提言

――「人間としての在り方生き方」を中心に据えたホームルーム活動への提言――

1　人間としての在り方生き方に関する教育の必要性

現代は、少年非行の低年齢化や高等学校中途退学者の増加にみられるように、生徒の意識や生活は大きく変化してきている。また、学習指導要領では「人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行う」ことを求めている。

調査結果によれば、「自分の短所を理解しているか」の設問に肯定的な回答をした生徒は約半数であったが、「自分の長所を理解しているか」の設問に肯定的な回答をした生徒は約2割であった。この自己評価の低さは、自分に自信がもてないことの現れであろうか。

「先生に一番教えて欲しいことは」の設問に対して、「進路について」と「人間としての在り方生き方」という回答が多かった。また、「将来希望する職業」については、3年生でも約3割の生徒がはっきりしないと回答している。このことは、生徒たちは、マスメディアの影響によって間接体験は豊富であるが、豊かな直接体験の機会を失いつつあること、多様な価値観の中で、自己の進路を選択・決定することが困難な状況にあることを意味しているのではなかろうか。

生徒が進路の選択・決定を行うには、前提として自己理解を深めること、それに基づいて職業や自分の進路について学ぶこと、そして進路選択に対する見通しと具体的な手だてを現実的に考えるという過程を経なければならない。生徒は、教師に対して、日常の教科指導はもとより、「人間としての在り方生き方」の指導を求めていると考えられる。

以上のことから、生徒が目的意識をもち、生きがいをもって学校生活を送るためには、学校の教育活動全体を通じて、「人間としての在り方生き方に関する教育」に取り組む必要があると考える。

2　なぜホームルーム活動なのか

「人間としての在り方生き方に関する教育」は、学校の教育活動全体を通じて行われるものである。特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」であるが、特にホームルーム活動は、それを深化・統合する場として重要な役割を担っている。しかし、現実にはホームルーム活動の内容が、担任からの連絡、席替え、レクリェーションなどの「人間としての在り方生き方」に関する内容からは遠いものになっている学校も少なくない。

ホームルーム集団は、学校における生徒の基礎的な生活集団である。したがって、生徒にとってホームルームでの生活がいかに充実したものになるかは、重要な問題である。

調査結果によれば、「あなたはクラスにとって必要とされているか」の設問には、約8割の生徒が否定的な回答をしている。自己有用感をもっていない生徒にとって、ホームルーム集団は帰属意識をもてず、魅力のないものになっていると考えられる。

しかし一方では、「充実感や楽しさを感じる」のは「友人」や「部活動」、「趣味」であった。また、「生き方について影響を受けたのはだれか」の設問には、「友人」を選んだ生徒が高い割合を示している。

このことは、つまらないなどと言われるホームルーム活動が、「人間としての在り方生き方」の指導を中心に据え、指導方法を改善・工夫することによって充実したものへと転化できること、また、そうすべきであることを示している。

本年度研究員は、特別活動の中で生徒の主体的・実践的な態度の育成に大きくかかわるホームルーム活動に焦点を絞り、「人間としての在り方生き方」の指導の工夫・改善の方策を探った。

3　ホームルーム活動における指導の工夫

人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うためには、生徒の興味・関心を喚起し、自己理解を深めさせ、さらに自主的・実践的な活動の場を与えることが重要である。

そのために、ホームルーム活動では何をすればよいのであろうか。指導はどのように行ったらよいのだろうか。前述の事柄を踏まえて、以下のことを提言したい。

(1)　自己の価値観を確立させ、個人としての在り方生き方を考えさせる。

自分の価値観を確立し、自己を形成していくことができる力を養い、自分らしさを創り上げていくためには、自主的・実践的な討論会等を通じて、仲間との共感関係の中で、他者の考えに触れさせ、自分の考えを深化させていく活動が有効である。

討論会を実施するにあたっては、自らの考えを深化させる工夫が必要である。また、討論のテーマは、身近な生活の場からのもの、社会生活に関するもの等を選び、個人としての在り方生き方を考えさせるものを選定する必要がある。

(2)　自己有用感を育て、社会の一員としての在り方生き方を考えさせる。

友人から人生の影響を受けた度合いが大きい反面、ホームルームでの自己の存在価値を低く見てしまう生徒が少なくない。自分も友人に影響を与えているはずであり、自分の影響をクラス内にとどめず、社会にまで広げて考えられることが大切である。人間は常に他人に関心をもち、互いに助け合ってしか生きられないという視点から、ボランティア活動は社会の一員としての在り方生き方を考えさせる活動として有効である。

ボランティア活動は、ボランティアクラブや有志としての活動の例が多い。しかし、今後は学校の教育活動として位置付け、学校全体として取り組む必要がある。

(3)　望ましい勤労観・職業観を育成し、将来の在り方生き方を考えさせる。

生徒に主体的に進路を選択・決定させるためには、望ましい勤労観・職業観の育成が重要である。そこで、職場訪問などに早い学年から取り組ませることは、将来の在り方生き方を考えさせる活動として有効であると考えられる。

職場訪問は、就職希望者に行わせる例が多い。しかし、勤労観・職業観の育成という観点から、すべての生徒に体験させる必要がある。また、進路の学習では、職場訪問などで得られた個人の経験が全体の共通財産となるような指導の工夫が必要である。

Ⅳ　ホームルーム活動の実践事例

1　事例１　「自分らしさの創造」 ―― 他人の意見・自分の考え ――

(1) ね　ら　い

多様で変化の激しい社会のなかで人間としての在り方生き方の指導を考えるとき、大人文化の継承として「人間はかくあるべきだ」といった一定の価値への方向付けを図る指導のみでは、価値観の多様化、相対化に対応できる力をはぐくむことは難しい。種々の考えや価値観が幅広く存在する現状においては、生徒が自分独自の選択基準、判断基準を確立し、それに基づいて自分にとっての価値を見出し、個性豊かに自分らしさを創造していくことができる力を育てる指導が重要になる。また、自分と異なる考えをもつ側や集団社会の一員としての立場から自己の考えを見つめることで、自らが志向した価値を相対化していく力の育成についても配慮すべきである。

本事例では、題材を生徒の身近な生活の場から選定し、「高校生のピアスを考える」とした。「ピアスをしてもよい」という価値観と、「高校生はピアスをすべきでない」という価値観をパラレルに配置し、集団活動を通して教師、まわりの友人たちの考えに触れるなかで、自分の考えを確立していく過程を具現させることをねらいとしている。

(2) 対　　象：２年生　男子２１名　女子１９名

対象ホームルームは、全般的にやや積極性にかけるが穏やかな生徒が多い。文化祭が終わり、一息ついた１０月上旬に実施した。

(3) 方　　法

活動は、生徒が意見を出しやすいよう班を編成して行った。自分の考えと他人の意見が異なった経験を身近な生活の場から各生徒に挙げさせ、それを班ごとにもち寄り、班長会議で題材の選定について事前に話し合った。「学校に制服は必要か」、「高校生はピアスをしてはいけないのか」、「アルバイトは、なぜ禁止なのか」等、種々の例が挙げられたが、話し合いの結果、「高校生のピアスを考える」に決定した。

生徒が自分の考え、他人の意見を整理、分析し、自らの考えを深化させていく道筋を分かりやすくする工夫として、「題材分析カード」（資料１）を作成し、それに基づいて授業を行った。以下、実践の経過をたどりながら授業の展開を記していく。

① 班長会議で決まった題材「高校生のピアスの是非」について、自分の考え、それと異なる意見の主張理由およびその意見の理解できる部分、理解できない部分を「カード」に記入する。

② 班のなかで各自の内容を発表し、互いに意見を述べ合う。

③ 班ごとに話し合った内容を全体の場で発表し、クラスの仲間の様々な考えに触れる。また、教師は必要に応じて異なる視点からの意見を述べ与え、それらとの関連において自分の考えを相対化させていく。

④ 種々の考えに触れた後、当初の自分の主張について再度考え、「カード」に記入する。その際、個人の立場、集団の一員としての立場の双方の視点から自己の判断理由を分析していく。

⑤　種々の価値判断が存在するなかで、自分が自信をもってこうだと言える価値観、考えを確立し、集団社会に生きる一員として自分らしさを創造していくためには、どうしていったらよいのかを考えていく。

⑥　「カード」を完成し、提出する。

活動の様子を概観してみると、「ピアスをしているという外見でその人の人格を判断してはいけない」、「誰にも迷惑をかけていない、個人の自由の問題」等、個人的な視点からピアス賛成派が多数を占め、当初は一方的な展開になりかかった。しかしその後、「ピアス、マニキュアをしていったら部活動の対外試合を断わられたことがあったので、部の一員の立場からは反対」という意見が出された。教師の方でも「○○高校の生徒の行動として、世間はその生徒およびその高校を評価する」といった意見があることを述べ、学校という集団の場に所属する一員の立場からの視点、ＴＰＯを踏まえるという観点を与えることで考えを対比させた。

ある班の話し合いでは、次のような意見が出された。

A「するかしないかは、個人の自由の問題だと思う」
B「自分ではそう思っても、ピアスをしていることで世間はうちの高校をマイナスのイメージでみるでしょう」
C「ピアスをしているという外見でその人の人格を判断するのはおかしいんじゃないか。日本にピアスをする習慣があれば、みんなつけているんだから」
D「外見でその人を評価するのはよくないというのはわかるけど、実際にはそう簡単にいかないし、私も中学校のときはそのような評価を少ししていた」
E「反対する大人が若かった頃、ピアスに代わる流行があったと思う。その時代の大人たちの多くはそれに賛成しなかったのではないのか。それと同じことだと思う」

資料１

『題材分析カード』

	自分の考え	（　　）の意見
主張の主旨		
主張する理由（根拠）		
理解（共感）できる部分		
理解（共感）できない部分		
その理由		
自分はどうすべきか（自己の行動の決断、考えの変化等）		
その判断をした理由	個人の立場から	集団の一員としての立場から
種々の価値観が存在するなかで、自分にとっての価値（考え）を確立していくためには、どうしていったらよいのだろうか		

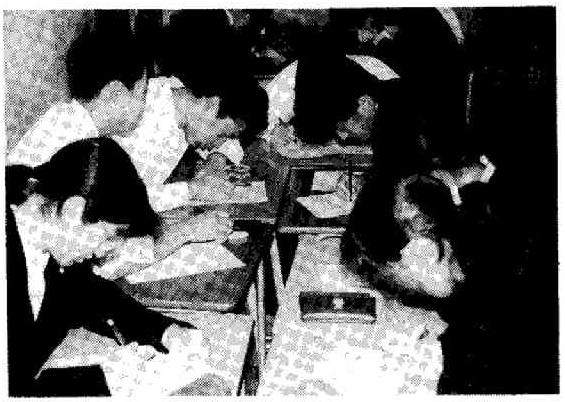
(4) 生徒の感想

生徒は話し合い活動を通して、一つの問題についての様々な考え方に接し、自らも考えを深めていった。提出された「カード」から、「自分流の価値の選択基準を確立していくための手法」について、生徒の考えをいくつか挙げてみる。

ア　自分でよく考える。自分がこうだと思うことについてはきちんと主張していく。他人の言ったことを鵜呑みにしないで分析する。

イ　とりあえず人の考えを無批判で聞き入れ、そのあと批判する。この批判をしないでおくと、他人の価値観がそのまま自分のものとなって危険。そうして、いろいろな価値を吸収し、よく考え、正しいと自分が信じられるものを選択し、自分のものとする。

ウ　自分以外の価値（考え）を理解しようとしたうえで、自分に必要なことを取り入れていく。理解した結果、どの考えにも共感できるからといって、自分の考えがもてなくなるのはだめだと思う。いろいろな考え方を知ったうえで、最初にもっていた自分の価値観を大事にしながら、一番よいと思うものを選ぶ。選んだら自信をもつ。



種々の価値観の存在を幅広く知り、その上で自分でしっかり考え、自己の価値観を確立していくことが大切であると記した生徒が多かった。さらに、活動を通して今まで知らなかった考え方に触れた、様々な立場からの視点をもつことも大切だと思った等の感想も見られた。

また、友人の意見を聞いて考えを修正していった生徒がいた反面、自分の考えがまわりに支持され、自己有用感、自尊感情を抱いた生徒も少数ではあるが見受けられた。

(5) 結果・考察

身近な題材について、考えを他者に問いかける場、他者の意見に触れる場を設定し、自分一人では学び得なかった考え方、発想方法を体得し、自己の考えを深めていく活動は、価値観の形成過程を生徒に意識させる上で有効であることが確認できた。

活動の反省として、「ピアスをしてもよい」という主張が単なる欲求のレベルなのか、自己表現のひとつの形態としての価値観の問題なのかをはっきりさせるべきであったという点が残った。

自分が自分であるという自己同一性（アイデンティティ）を確立していく過程には、理想と思う人の生き方、共感できる考えを模倣し、自己を同一化していく段階があるとされる。生徒がこの段階を経て、他人の影響から少しずつ離れ、本当の自分らしさを創造し、自らの在り方生き方を確立していくためには、ものごとを主体的に考えていこうとする積極的な態度が不可欠である。また、自分が生き生きと活躍する場面を通して自信を深めていくことも大切である。このような観点からも今回の活動を振り返り、今後の指導に生かしていきたい。

2　事例２　「自主的・実践的な討論活動」　― 少年の匿名報道 ―

(1)　ね　ら　い

調査結果によれば、「高校生になってからあなたの生き方は、次のそれぞれの事柄にどの程度影響を受けましたか」という設問について、56.4%が「友人」の項目で「かなり受けた」または「やや受けた」と回答している。これは第２順位の「家族」の34.7%を大きく上回っている。このことから、人間としての在り方生き方についての指導を進めるとき、教師は現在の生徒の考え方、生徒が友人から受ける影響について常に新しい情報を知る必要があり、また生徒は友人同士、あるいは先輩・後輩の中での活発な意見交換が必要であると考える。

そこで、以下の３つのねらいの基に、クラス内で一つのテーマについて民主的かつ自主的・実践的な討論会を行うことにした。

①　自分の考えと他人の考えを対比し、新たな考えを構築することや自分自身の考えを深化させること。

②　生徒一人一人が人間としての在り方生き方についての自覚を深め、現在の社会情勢を見つめ、将来を見通しながら自らの生き方を確立できるようにすること。

③　主題に対する自己の適切な判断基準や価値観を養い、主体的に物事を選択・決定できるようにすること。

(2)　対　　象：２年生　男子２５名　女子１０名

実施クラスにおいては、もともと自己主張をする生徒が目立つ。これまでのホームルーム活動においてクラス内で討議をしたことがなかった。いきなり討論会を行ったのでは意見がなかなか出ないことが十分予測できるので、事前指導に十分な時間をかけることに重点をおいた。

(3)　方　　法

ア　事前指導

事前のホームルームで、討論内容を各自が検討できるように討論のテーマとなる「保安処分」、「死刑廃止論」、「少年の匿名報道」についての資料を配布した。その後、各テーマについて教師が説明を加え、教師の考えを述べた。具体例を挙げることにより、生徒個人にテーマをしっかり把握させられるようにした。この３つのテーマについては、ねらいの二つ目にもあるように、社会的な内容を取り入れることにより、一般社会についての意識付けとすることを目的として設定した。そしてホームルーム活動の終了時に、他の高校生が同じテーマについて述べた意見や考えを載せた資料も配布した。また、他人の考えを知る方法として「Ｘからの手紙」や「ディベート」についても、以前からクラス内でやってみたいという風潮が生まれたこともあり、その手法についてもどんなものであるかを十分に説明をしておいた。

さらに「ディベート」については４名のクラス内のリーダー的生徒にはその手法を一層詳しく説明しておき、今回の討論活動は、相手の考えを論破することが目的ではなく、あくまでも民主的かつ自主的・実践的な討論活動であることを指導しておいた。そして、本活動時における司会者を４名の中で相談して当日までに決定しておくように伝えておいた。

イ　当日の指導

最初に討論会の司会者の承認を取り、テーマを何にするかの話し合いをもった。生徒にとって一番身近である「少年の匿名報道」について、各自の意見を出し合うことに決定した。

本活動においては、自分の考えと他人の考えを対比させるために、「記録カード」を作成した。当初の自分の考えと違っている他人の考え方についても共感できる点を記録させることにより、視野の広がり及び自らの考えについて深化していくことを認識させる工夫をした。以下生徒の自主的な実践活動の経過を述べる。

① 司会者が「少年の匿名報道」について「現在の高校生に必要である」と思っている生徒と「必要ではない」と思っている生徒を教室内で分けさせ、向かい合わせに座らせる。

② 討論活動がはじまる。お互い質問から入り、相手の出方をうかがう。

③ 激論が交わされる。匿名報道の年齢が討論の中心になる（成人者にまで討論の対象が広がる）。

④ 他人の意見に共感を受け、席を移動する生徒が２名ほど出る。

⑤ 意見が一旦出尽くしたようであったので司会者を呼び、ここで再度資料に全員が目を通すことによって討論の活性化を図る。

⑥ 再び激論が交わされる。討論の内容が「事故であった場合」と「事件であった場合」の違いについて焦点が定まる。再び座席を移動する生徒が３名ほど出る。

⑦ 他人の意見で共感できる部分や自分の考え方の変化について記録カードに記入させる。

⑧ 最終的な自分の考えについて記録カードに記入させ提出させる。

ウ　結　　果

提出された記録カードから、本時のテーマである「少年の匿名報道」について、当初の考えと最終的な考えに変化のあったもののいくつかは下記のとおりである。

当初の自分の考え	討論後の自分の考え
社会復帰を考えると実名を出すのはまずいと思う。若い人がよく反省し、これからという時に一生レッテルを貼られて生きていかなければならなくなるので匿名報道は必要であると思う。	人道的に許せないことや、あまりにもひどいことやった者の名前は出してもよいのかなと思うようになった。しかし、その人間の将来を考えると、出すべきではないとも思う。どちらとも言えなくなってきた。
匿名報道はあった方がよい。親や兄弟等周りの者がかわいそう。	悪意をもって犯罪を犯した場合は、未成年者でも出すべき。事故の場合は出さない。
匿名報道は１５歳までは必要。その後は大人に近いので名を出してもよい。	事故で起こったものについては名を出さなくてもよいが、自分の意志でやったものについては出すべきだ。その時の状況による。
匿名報道は中学生までよい。義務教育を終えている人は一般常識をもっているから、名を出してもよい。	やはり名を出してもよいと思うが、不慮の事故によるものは出せないと思った。

心を入れ替えて社会に出るときに困るので、匿名報道は必要であると考える。またマスコミの報道は正確でないこともあるので匿名報道でよいと思う。	本人の自覚や年齢、事故と事件など色々な内容を含めると、どちらとも言えなくなってきた。
本人が反省して今後の人生を悔い改めて生きていこうとしている時に、就職を拒否されたりしたのでは、その人の人権をあまりにも無視することになるので匿名報道は必要である。	事故については匿名報道であってもよいが、悪意がある故意によるものについては、実名報道という考え方には共感できた。最終的には匿名報道は必要であると思う。

(4) 生徒の感想

① テーマに沿って色々な意見を色々な人が言って、たくさんのことを知ることができた。

② 他人の意見を聞くことができ考え方が変わった。もっと色々なことについて皆と話し合いたい。

③ 司会者が中立である必要性が分かった。

④ 初めてのことでなかなかおもしろかった。新鮮味があった。もっとたくさん意見を出してもらって多くの人の考え方を聞きたい。

⑤ 非常におもしろかったが熱くなりすぎ感情的に発言することはよくない。また人の意見は最後まで聞くべきで途中で他人の意見をさえぎり、自分の意見を述べるべきではない。さらに、発言する人は自分の考えを整理してから発言すべきだ。

⑥ 授業より大切なことではないかと思った。自分たちで資料を集めて行えばもっと充実した内容になると思う。

(5) 考　　察

討論活動は、当初の予想をはるかに上回る活発な意見交換の場となった。その第一の要因は事前指導にあり、生徒の興味・関心の高い題材を設定し、生徒の側と綿密な打ち合わせをしておくことが必要である。なお、日頃のホームルーム活動で「他人の考えや意見について知りたくないか」という教師からの働きかけにより、生徒間にごく自然に「討論活動等何かをやってみよう」という雰囲気を醸成させることも大切である。また、記録カードを用いたことにより、討論活動の前後で自分の考えの変化及び他人の意見、主張について共感できる点を明確にとらえることができ、最終的な自分自身の考えを深化させることができたと思われる。司会の生徒が教室内を二つに分け、討論しやすいように向かい合わせに座らせたことは、事前に「ディベート」の手法についてクラス全員に説明をしておいたので、それに基づいたものと考える。

指導が困難視されるホームルーム活動における討論活動は、教師が適切な題材を設定し、具体的な討論方法を指導・工夫することによって、「人間としての在り方生き方」に関する教育を具体的に展開できることが確認できた。

3　事例３　「ボランティア活動への動機付け」

――― １年生全員を対象とするボランティア活動入門講座 ―――

(1)　ね　ら　い

調査結果を見ると、ボランティア活動に興味のない理由として「どういうものがあるのか分からないので（情報の不足）」、「今までにやったことがないから（経験の不足）」を挙げた者が合わせて47.5%おり、また、ボランティア活動に参加したことがあると答えた者のうち、その動機として「学校行事にあったから」を選んだ者が43.5%いた。このことを考えると、特別活動の一環として、ボランティア活動とはどういうものかを学び、基礎的な技術を習得することは、意義あることだと思われる。

さらに、人間としての在り方生き方の自覚を深める上で、「人間は他人に関心をもち、互いに助け合ってしか生きられない」という視点に立つことは重要である。その意味でもボランティア活動は教育の一つの内容として有用であると考えられる。また、自己を生かす能力を養う上でもボランティア活動は「自己実現を可能にする新しい場」ともなり得る。

(2)　対　　象：１年生　男子８４名　女子７９名

本校は、都心にある一学年４クラス（全校１２クラス）の小規模な学校である。数年前より、学校の特色の一つとしてボランティア活動に力を入れてきた。

(3)　計　　画

小・中学校段階ではすでに学校ぐるみでの実践が報告されてはいるが、高等学校段階ではホームルーム単位・クラブ単位での活動が多いように思われる。

計画を練るに当たって、なるべく大きい単位で活動できないかを模索した。多人数の生徒に働きかける場合、動機付けに重きを置いた計画にする必要がある。それにはどういう企画が有効であるかを探るために、準備段階では色々な企画を希望者対象に試みた。

「救急法の講習会」、「車椅子の介助法」、「留学生との親善バレーボール大会」、「ボランティア関係者を招いての講演会」、「あしなが街頭募金活動の参加」、「夏休み中の各地域での体験ボランティアの紹介と参加」、「テレホンカード・切手を収集し関係協会に送る」、「近隣の清掃活動」などできそうなものをどんどん行い、約２年間ノウハウを蓄積した。また、この間教員によるボランティア委員会を発足させ、各関係機関を訪問して資料・情報の収集に当たるとともに、東京都及び区よりボランティア協力校の指定を取り付け、社会福祉協議会との連絡を円滑にし、運営費として助成金を確保した。

当初は全校生徒を対象にしたかなり大掛かりなものを計画していた。つまり、１学期に動機付けを行い、講習会を開いて基礎的な手話・点字・介助法などの技術を身に付けさせ、２学期には各種の施設を訪問して実地に体験をさせ、３学期には生徒個人個人の希望により様々なボランティア活動をする、等々・・・。これを各学期一回ずつ学校行事として全校をあげて行う。

しかし、実際には生徒の意識、教員の指導体制、講師や受け入れ施設の確保等を考えると全校で実施するには無理があった。そこで、全校生徒を対象とするという趣旨を尊重しながらなるべく大きい単位で実施する計画を立てた。

結果的に対象を１年生に絞り、内容を班別体験学習形式のボランティア入門講座を主体

とした活動とし、行事の名称を「オープン・マインド・タイム」とした。名称の由来は、「自分やその周りだけの狭い視野から抜け出し、広い世界に気付かせる」ことや、「学力とは違う自己の能力の発見」にある。特にボランティアの文字を入れていないのは、活動そのものより動機付けに重きを置きたかったからである。また、対象を１年生としたのは、２・３年生を対象をとするよりは、より新鮮な気持ちでいる１年生の方が効果があり、毎年行えば３年後には全校生徒が何等かの活動をしたことになるからである。活動のメインとなる体験学習の内容は以下のようになった。

①対象：１年生全員（４クラス約１６０人）

②コースと内容

人数が多いので、コースを複数設け、なるべく生徒の希望に沿えるようにした。講座の内容は既に準備段階で経験しているので、細かな打ち合わせはせずにすべて担当の講師に任せた。実施された内容は以下のようになった。

「手　　話」：手話とは何か、耳の不自由な人は何故話せないのか、障害者との接し方などの話の後に、基礎的な手話の訓練（各自の名前の表し方、挨拶、感情の表し方など）を受けた。

「点　　字」：点字の成り立ちなどの話や点字パソコンのデモンストレーションの後に、実際に点字機を使っての名刺作りを体験した。

「ガイドヘルプ」：目の不自由な人との接し方や講話を聞き、校舎内でアイマスクをしての疑似体験をした。

「車椅子介助法」：校庭で車椅子の仕組みや扱い方の説明の後に、実際に２・３人でグループを作り街中を廻った。電動車椅子の試乗なども行った。

「救命救急法」：命の大切さ・初期の対応がいかに大切かなどの話の後、ダミーを使って一人一人が心臓マッサージと人工呼吸の技術を習得した。

③実施方法：４クラスを１・２組と３・４組に分け、さらにそれぞれを５班に分けた。

④実施時期：１・２組は２学期、３・４組は３学期。それぞれＬＨＲ１時間とその前の授業１時間で計２時間を充てた。

⑤講　　師：手話・点字・ガイドヘルプはボランティアセンターに各２名の派遣を依頼。
救命救急法は、所轄の消防署の職員６・７名。
車椅子介助法は学校の近所に住み、既に何回か講習会に来ていただいていた３名の方にお願いした。

(4) 実　施

１学期　６月上旬　１・２組　ビデオ鑑賞「遥かなる甲子園」　ＬＨＲ＋１時間
　　中旬　３・４組　同内容
　　下旬　鑑賞後の感想文（ＬＨＲ）

２学期　11月上旬　１・２組コース希望調査および調整
　　中旬　１・２組の生徒を対象に５班に分けての体験学習　ＬＨＲ＋１時間

下旬　体験学習の感想文（ＬＨＲ）

３学期　１月中旬　３・４組　同内容で体験学習

(5)　生徒の感想（体験学習の感想文より）

＊街で手話をしている人を見かけたとき、「ありがとう」と言っているのが分かり、うれしかった。耳の不自由な人のために役立ちたいと思う。＊体の不自由な人への接し方が分かったので、道で困っていたら声をかけてあげたいと思う。＊講義を受ける前はつまらなそうだと思っていたけれど、受けた後は何か得したような気分で、耳の聞こえない人とちょっとは話ができるかなと思う。＊思っていたよりもすごく面白かった。たった２時間の講習だったけれど、貴重な体験になった。＊手話の教室とかあるけど、なかなか行けないので学校でやってもらえるとうれしい。＊今まで「耳が聞こえない人は口もきけない」というのが不思議だったが、講師の先生の話でよく分かった。＊点字は目の見えない人にとってはかけがえのないものだと分かった。講師の先生がすらすら読んでいるのにはびっくりした。＊目の見えない人は可哀想だとだけしか思っていなかったけど、本当は光のない世界で一生懸命に生きているのだと分かった。＊点字は目の見えない人からすれば読み書きできる唯一のものなので、今度は本を書いてあげたいと思った。＊目が見えないというのがいかに大変なことか分かった。これからは道であったら助けてあげたいと思う。＊すごく楽しかった。点字を通じて色々な人に触れ合いたいと思う。＊救急車が現場に着くまでの５分間で、助かる確率が４倍になるとは思わなかった。人形を使っての練習が面白かった。＊人工呼吸や心臓マッサージなんて簡単に考えていたけれど、ちゃんと習わないと人を助けるどころか、殺してしまうかもしれないことなので習えて良かった。＊汗をフキフキ教えて下さった講師の先生に感謝しています。救急法の大切さがよく分かりました。＊救急法は前から教わりたかったが、講義の後ではもっと色々なことが知りたくなった。

(6)　考　　察

ビデオ「遥かなる甲子園」は耳の聞こえない高校生たちが野球部をつくり、甲子園を目指すという物語で、生徒たちに書かせた感想文では、非常に好評でボランティア活動への意識が高揚したと思われる。班別の体験学習は、初回なので色々不備な面が生じるのを覚悟していたが、担当以外の教員の協力も得られ、スムーズに運営された。

生徒たちにはかなりインパクトがあったようで、感想文などに色々な「発見」や「気づき」を述べていた。ほとんどが肯定的にとらえており、否定的な感想を述べた者は一人もなく、教員側が期待した以上に反応は良かった。また、普段教室で教師が手を焼いている生徒が、車椅子の講習に参加した後、道で車椅子を使われている方の手助けをしたというエピソードもある。したがって、動機付けというねらいは概ね成功したと思われる。

当初の計画では動機付けにとどまらず、施設訪問や実際の活動を予定し、規模も全学年単位を考えていた。しかし、当分の間、このままの形で続けて基盤をしっかりさせた方が良いという意見が教員側に多かった。「気づき」があったからといって、それがその後の行動に現れることとは別である。もう少しつっこんだ勉強をしてみたいという生徒も少数ながら出ているので、今後はどういう形でそれらの生徒に対応するか、どうやって生徒一人一人の活動を喚起するか、また対人間だけでなく環境問題も含めて検討していきたい。

4　事例４　「主体的な進路学習」

― 職場訪問と報告会を通して、働くことや職業のもつ意義を理解し、進路を考える ―

(1)　ね　ら　い

調査結果によると、「職業を決める理由で一番重視するもの」については、６８％の生徒が「仕事の内容」を選んでおり、「職業についての考え方や感じ方で一番近いもの」については、５７％の生徒が「自分の個性や能力を生かせる仕事をして、生きがいを見いだしたい」を選んでいる。しかしながら、「将来希望している職業がはっきりしていますか」の設問に、高１で５４％、高２で４８％、高３でも３５％の生徒が「あまりはっきりしていない」又は「はっきりしていない」と回答している。仕事内容で職業を決め、個性や能力を生かして生きがいを見つけていきたいと考えているにもかかわらず、３年生になってもまだ３分の１の生徒が将来の職業をはっきりさせられないのは、働くことや職業についての学習不足、とりわけ直接的な体験学習の不足によるものではないだろうか。職業が人生の全てを決定する訳ではないが、充実した人生を送ろうとした時、働くことや職業のもつ意義について考えることは、大変有意義なことである。また生徒一人一人が自分の在り方生き方を考える上で職場の生の姿を見て来ることは、貴重な体験となるとともに、自らの進路を選択をする際に有益な点が多いと考える。

本事例では、次の２点を工夫した。

①　職場訪問を個人的な学習や体験だけにとどめず、班活動の一環としてとらえ、全員が少なくとも一つの係を担いながら班全体として取り組むようにした。

②　自分たちが訪問して得た知識・興味・関心を、撮影してきた写真などを用いて模造紙にまとめたり、質問事項や感想を報告書にまとめて発表する機会を設けたりすることによって、自分たちが訪問できなかった他の６つの職場についても同様な体験を積めるようにした。上記①、②の活動を通して、働くことの意義や社会の厳しさを知るとともに、一人一人の主体性を育成し、全体としてまとまりのある活動を行い、自分たちの将来の展望と、今後の学習のステップになることをねらいとした。

(2)　対　　象：１年生　男子２２名　女子１９名

本校は１学年６学級規模の普通科の高校で、９０％が進学希望である。また男女の数は、学校全体で５０名程度男子が多い。自由な校風の中で自律できる生徒の育成に努めている。対象となったクラスは、昨年まで進路指導部を担当していた教諭が担任をしており、入学当初から、１班５～６名の７つの班を編成し進路学習に重点を置いたクラス経営を行ってきた。

(3)　方　　法

９月末から１１月中旬までに行ったロングホームルームの指導内容を、以下に、項目ごとに記す。

ア～カは、それぞれロングホームルーム１単位時間の内容である。

ア　事前学習①（職場訪問のねらい、訪問先の決定、質問事項の整理・検討、係分担）

進路の選択は単に卒業後の行き先を決めることではなく、自分が人生をどう生きていくかという、人間としての在り方生き方に、深くかかわる事柄である。この様な観点か

ら進路を考える際に、働くことや職業のもつ意義について考えるなど、広い視野から自分の進路を考えるようにできることが必要である。そこで、人生経験豊かな現場の人の声を聞き、働くことの意義や日頃苦労している点などを質問して来ることによって、上記のねらいを達成するようにした。また、訪問結果を互いに発表し合うことにより、さらに広い視野から個々の進路を考えられるように配慮した。訪問先は、学校から１時間以内に訪問できる職場をあらかじめ７カ所を選んでおき、班ごとに話合いで決定した。また、班内の係分担（班長、副班長、インタビュー係、書記、写真係、お礼状係、報告書作成係、発表係）や訪問時の質問事項の整理・検討（企業データ、生活データ、求められる学生像、企業等が１番力を入れている事柄、その他、を骨子に班ごとに自分たち達で考えた質問事項）も行った。

イ　事前学習②（ビデオ観賞による職場の研究）

職場訪問に先立ち、公官庁作成のビデオ（２０分）と、企業作成のビデオ（１５分）の２本を観賞する。職場内で様々な人が働いている姿を職場の側からの映像で見ることにより、働くことの意義や働いている人の意欲、職業のもつ意義等を考えさせる。また、班ごとに訪問する職場に対する、見学時の観点や、質問事項の整理・検討の参考とした。

ウ　職場訪問

ロングホームルームの最初の５分間位で、訪問の仕方、挨拶の仕方を学習した。訪問終了後、必ず学校に電話連絡を入れるように指示した。班ごとに訪問先に向かった。教員は引率せず、校長の依頼状を各班の班長に渡した。班によっては、訪問先での丁寧な説明と、見学に時間がかかり訪問終了が午後７時頃になったところもあった。その後、班ごとに礼状を作成した。

エ　事後学習①（訪問結果発表のための作業）

訪問結果を発表するため、撮影してきた写真や取材してきた事柄を基に、模造紙に訪問結果の概要を書いたり、詳細な報告書（各班ともＢ５のワープロ原稿で３ページから５ページ程度のもの）を作成した。また発表係は発表のための原稿作りをした。班員全員が、１週間ないしは２週間後の発表を成功させるために力を出し合った。内容が豊富であったので、１時間以内で全部やりきれずに、放課後等を利用してまとめている班が多かった。しかし班内の連帯は深まり、皆真剣に取り組んでいた。

オ及びカ　事後学習②

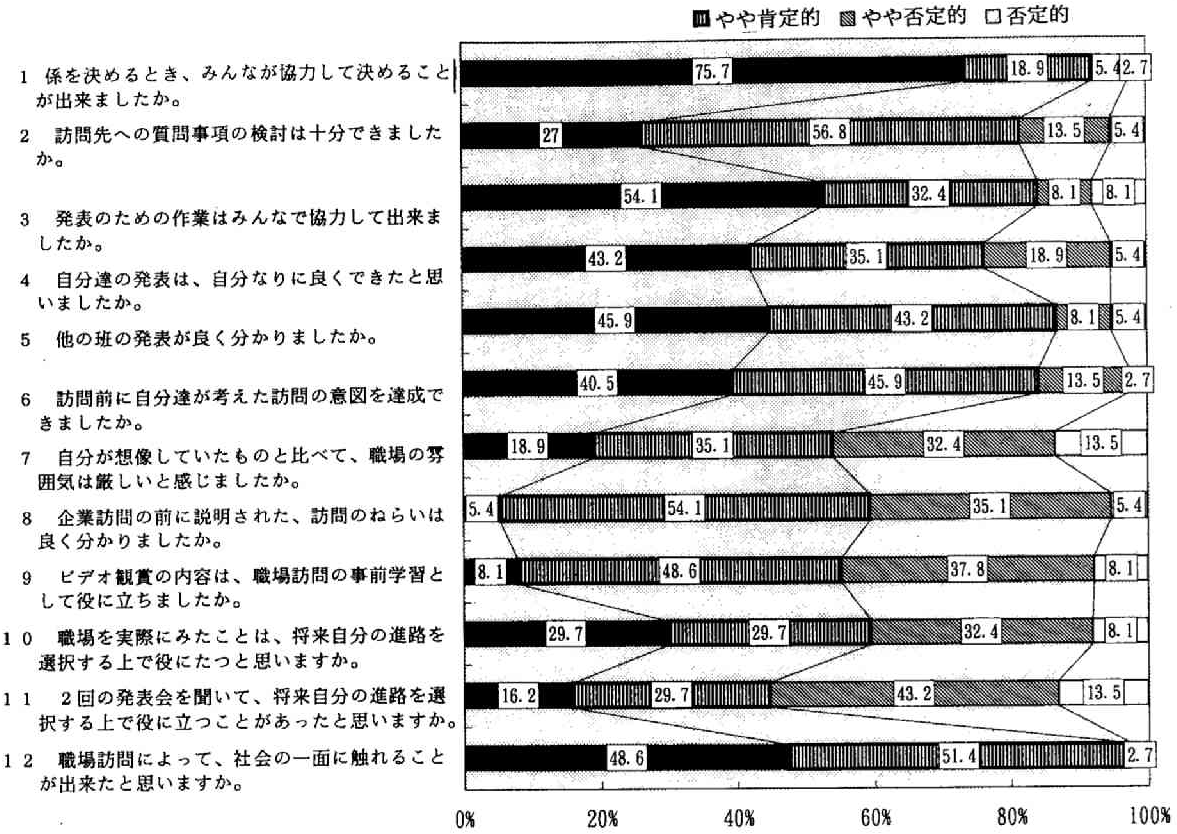
（訪問結果の発表会１、２）

発表会は各班１０分とし２週に分けて行った。どの班も準備万端整えて内容の濃い発表となった。模造紙に書いた概要を説明しながら、全員に配布した報告書を基に、どの班も１０分間の制限時間一杯まで発表したため、１回目の４つの班の発表は時間内に終了できるか心配したほどであった。発表慣れしていないせい

と、１回目は教室で発表を行ったせいか、発表が聞き取りにくい場面もあった。この教訓を生かして２回目は視聴覚室で行った。前回の発表より分かりやすく、聞き取りやすくなった。

(4) 結果・考察

発表会終了後、事前学習から事後学習までの一連の学習について、アンケート調査を行った。その集計から下図のような結果を得た。



これによると、設問１～４のクラスの係活動や班活動に関するものに対しては、肯定的またはやや肯定的な回答が大変多く、設問５、６の発表や訪問の意図についてもよく理解できており、クラスの係活動や班活動を通して生徒一人一人が得たものは、多かったと考えられる。しかし、設問８の訪問のねらいや、設問９～１１の「役に立ったか」という設問にはまだはっきり答えられない生徒が多い。設問１２の「社会の一面に触れることができたか」については殆どが肯定的に答えており、この活動が有効であったことを物語っている。班ごとの報告書による感想では、初めは「面倒くさい」、「嫌だ」と思っていた生徒７名の内５名が、訪問後には「やってとても良かった」に変わった。若干名だが自分の将来と重ね合わせて、「こういう仕事につくなら理数系を学んだ方がよい」、「編集者になるには大卒が有利で短大卒だと編集の仕事につけない」など具体的に身近な進路について言及している生徒もいた。現代は仕事が細分化され、職業人の多くが給与所得者となっており、親が仕事をする姿すら殆ど見たことがない生徒が多い。生徒に職場訪問の機会を設けることは、主体的に進路を選択していくために必要な試みであると考えられる。また１回限りに終らず継続的に学習をしていくことが必要である。

Ⅴ まとめ

生徒は、ホームルームという集団の中で自己を高めていくことの重要性を認識することによって、「学ぶ意欲」を高めていく。また、ホームルームという集団の中で自己理解・相互理解を深化させることによって、集団への「帰属意識」を自然にはぐくんでいく。

ホームルーム活動を中心とする特別活動の究極的な目標は、自主的、実践的な態度の育成と、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養うことである。

このことから本年度研究員は、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う指導の工夫」を研究主題とし、ホームルーム活動に焦点を当て、人間としての在り方生き方の指導について研究を行った。

初めに生徒の意識を知るため、調査の柱を①自己理解について、②進路について、③ボランティア活動について、④生き方についての4領域とする47項目のアンケート調査を実施した。

この結果、①からは、自ら進んで役割を遂行するといった奉仕の精神が乏しい点や、教師や地域の人などとの人間関係の稀薄さなどがうかがえた。②からは、何らかのかたちで教師からの指導・助言の必要性を訴える生徒が7割以上に達していることが分かった。③からは、ボランティア活動によって自己有用感を得た生徒が多いことが分かった。④からは、他者からの影響が少ないと回答した生徒の方が「楽しければいい」といった、やや刹那的な人生観をもつことが分かった。いずれも興味深い結果となっている。

これらの分析から、教師がどのように指導・助言すれば、①自らに対する理解が深まり、自分らしさを育てられるのか、②自己有用感や他人に対する思いやりの心を培うことができるのか、③望ましい職業観・勤労観を身に付けられるのか、などの問題意識をもつとともに、ホームルーム活動の充実・工夫の必要性を実感した。

調査結果の分析・考察から、望ましいホームルーム活動の在り方について検討を行い、指導方法の工夫を提言するとともに、以下のような研究員の所属校における実践例を示した。

(1)「自分らしさの創造」

(2)「自主的・実践的な討論活動」

(3)「ボランティア活動への動機付け」

(4)「主体的な進路学習」

本報告書では、アンケート調査の4領域の分析・考察から提言を行い、実践例を示したが、ここに挙げたもの以外にも様々な創意工夫が考えられる。多様化してきた生徒を対象として「人間としての在り方生き方」の指導を考えるとき、生徒の価値観の多様化については、今後さらに研究する必要性がある。

ことに、冒頭に述べたごとく生徒自らが、「人間としての在り方生き方についての自覚を深める」ということを特別活動の大きな目標として考えたとき、私たち教師にとって、ホームルーム活動等の学校生活全体を通じて、生徒同士が人間関係を深められるようにすることが重要な課題となる。さらに、生徒の実態に即して具体的に指導のねらいを定め、身近な問題点を踏まえて指導・助言を行うことや、生徒の自主的な活動意欲の育成に努めることが肝要である。そのためには、教師が積極的に生徒との人間関係を築いていくことが大切であると考える。